

番外二 ときは流れて

一

むかしのはなしである。

彼は、風を受けながら立っていた。

長く、寒い季節の終わりを告げる、あたたかな風。
七尺(注)はあろうかという身体に乗った、岩のような顔をなでるように、風が吹きぬけてゆく。

風の中に、ふと、みどりの香りを感じる。もう新たな草が萌もえはじめているのだろうか？

男は表情を変えずに、ただ目蓋まぶただけをゆっくりともち上げた。開いた眼まなこの先には、ただ黄色の大地と、茶色の草だけが広がっている。

と、背後に気配けはいを感じる。腕が勝手に背の皮袋に突っ込まれ…そこで止まった。

「なにぼーっとしてるのよー!」

彼は、袋の中で握り締める手をゆっくりと開くと、苦笑しながら取り出した。ずしり、重さが再び背中にかかる。

振り向けば、娘が馬上ばじょうで笑っていた。

男は娘のほうに向かって困ったような笑顔を見せると、また頭をもとに戻して広い大地を見つめた。

(もう、使うこともねえんだよね…)

背中の袋の中身が、さらに重くなったような気がした。

二

いまで言うなら中国のやや北の方。広い草原のかなたに日が落ち、馬たちが足をたたみはじめるころ、彼は自分の天幕テントへと戻っていった。

食事までには間がある。彼は背中の大きな袋を、目

の前の小さな机に置くと、ゆっくりと中身を引つ張り出した。

「ごりごりと音を立てて取り出されたもの、それは斧おのだった。彼の体に見合った大きな斧。しかし、人の丈ほどの樹木すらないこの草原では無用の長物。

彼は、天幕の奥からなめし皮を取り出すと、汚れてもない斧の刃を丹念たんねんに磨みがき始めた。

その姿は、すでにただの習慣でしかなかった。

と、そこにいきなり、『風』が回った。

外に流れる暖かな春の風ではない。目には見えな
い、『なにか』の流れ、それを彼は…彼らは『風』と呼ぶ。

男は斧を拭く手を休め、右目だけでその場所を見る。目ではなにも見えない。だが、そこになにかが
集まっているのだ。彼にはそれがわかった。

彼が大きく一呼吸したあたりで、そこに人の姿があらわれた。斧を脇に置き、様子を見ている彼から

見れば小柄だが、普通なら巨漢きよかんと言えるその身体をやや屈かがめ、目の前で拳こぶしをおさえて礼をとる。

「お休みのところ、失礼いたします。岳生がくしやうどの…ですか？」

呼ばれた男…岳生は居住いすまいを正す。と言つても、あぐらをやめて隅の小さな椅子いすに腰掛こしけなおしたただけだが。

「ん？…緑宝寺りよくほうじの使いかい？」

相手の青年は、礼をとつた形のまま、もう一度頭を軽く下げた。

「はい。不躰ぶじゆな訪問、お許しを。他の方が驚くかと思ひ、直接参上いたしました」

そう話す青年の顔を、男はしばし覗きこむように見ていたが、やがて口を開いた。

「心遣こころづかいにも感謝しとかア。でもよ、まだお前めえのことを聞いてねえぜ」

青年はぱつと顔をあげ、同時に拳を押さえたまま

3 番外二 ときは流れて

の手を掲げるように高く上げた。

「失礼しました。私は風珀呪の宗珀と申します」

男は苦い顔でふいに立ち上がった。宗珀の手を両手で掴んで礼をやめさせると、机の下から小さな椅子を取り出し、座らせてから元の位置に戻る。

そして、腕を組んだ。

「宗珀…風珀呪？お前、ひょっとして赤珀大老の弟子か？」

「はい。よくご存じで」

青年は驚いて目を見開いた。岳生は大きくうなずいて、

「そうか、あの爺さまも弟子とってたんか…九年だもんなあ。

ん、わかった。爺さまの弟子なら疑いようもねえ。はなしあんたる？言ってみな」

「実は…おご存知かと存じます、が…」

岳生が苦笑した。

岩の造形が変わって仁王のように見える。これを見ておられると思える者など、そう多くはいないだろう。

「おいおい、慣れねえ言葉なんか使つなよ。俺のこをどう教えられたンか知らねえが、取って食ったりやしねえぞ」

宗珀もまた苦笑した。

「では…つい最近、地震があったでしょう。そのせいで、緑宝寺の術師がみんな出払ってしまったんですよ」

『術師』——それは、仙人に匹敵する力を持ちながら、歴史の表舞台はおろか、伝承にすら姿を見せない存在である。

岳生と宗珀は、ともに衝派の術師。西の地『緑宝寺』を拠点に、いのちのもととも言われる『光』を用い、宿敵『空魔』を倒すためだけに術を磨く者たち…実際には、そんなに格好のよいものではないのだが。

「なるほど。地震の片付けて誰も手が離せねえから、閑人に雷遊子の護衛をせい、か」

衝派の中でも希な才能をもつ術師見習い、雷遊子。十にも満たない子供の彼は、いまは師の命を受けて旅の途中にあるはずである…たった一人で。

「閑人がどつかは知りませんが…緑宝寺がおっしやるには、あなたがもうそろそろ術師として動きたくなってる頃だろうから、ひとつ仕事をさせてあげては、だそうですよ」

岳生の肩間に皺が寄った。

「まあ、誰もつけてねえって方がおかしいやな」

「いえ、すでに泉碓どのが…」

秀泉碓。仙道にもかかわっている、衝派きつての変わり者。岳生にとっては古くからの知り合いであり、もちろん、その実力もよく知っている。

「なんだ、あいつがいんのか。だったら問題ねえよ。大勢行っただって邪魔ンなるだけ…」

と、目の前に突き出された手に、岳生の言葉が封

じられた。

「じつは、そのこともあるんです。これを…」

宗珀が腰の袋から取り出したのは、白い布に包まれた人の腕ほどの荷物。机の上で包みをほどいた瞬間、岳生の目がかつと見開かれた。

「……正気かい！」

中には、鉄と木を組み合わせた棒がいく本かと、細く長い刃が一本。奇妙な形の鎖で、各々つながっている。

岳生は、その荷物の重さを確かめるかのように何度か持ちなおし、握りなおしていたが、やがてため息まじりに言った。

「あいつに、これ渡さによいけねえような相手なんか。そりや碓かに、護衛が一人だけじゃ辛えかも知んねえな…」

遠くで、岳生の名を呼ぶ声がする。

「まあ、話あわかった。明日ンでも出るとしよう」

5 番外二 ときは流れて

岳生は荷物を再び白い布に包みなおすと、急いで机の下に放り込んだ。

「では、ぼくはこれで」

「悪いな、急かしちゃまって」

宗珀は軽くにこりと顔をくずすと、そのまま空に溶けていった。

岳生は消えたあとをしばらく眺めていたが、はつと我にかえると目の前の大きな斧を、磨いていたなめし皮ごと袋に放り込んだ。それと同時に、天幕の入り口がばさつと開く。

「いま、誰かいたでしょ？」

年の頃なら十八かそこら。腰まで届きそうな長い三つ編みを、肩から前にたらした娘がそう言いながら、ちよつときつい目をして天幕の中を見回している。

「おいおいチャムリ、俺がだれか連れ込んだでるとでも思ったんか？」

チャムリの口が尖る。そのままばくばくと口をあけしめしていたが、しまいに一言、

「食事、なしよ！」

それだけ残して立ち去っていった。

チャムリの出でいったあと、岳生はひとり、薄くなめした羊皮に向かって筆を走らせていた。

慣れていないのか、数文字書いては頭を掻き、また数文字書いては宙を見上げ。なんとか書き上げたものを机の見つけやすいところに置くと、宗珀から預かった荷物と先ほどまで磨いていた大きな斧を袋に詰め込み、そのままふとんにもぐりこんだ。

三

夜中、丸い月が天の頂上を通り過ぎるころ、その光に照らされたひとつの影が、岳生の天幕にもぐりこんだ。

影は机の上の紙切れを取り、暗い中でじつと目をこらしていたが、そのうち脇にあった墨壺に指をつつ

こみ、紙切れの隅になんごとか書き付けた。

大きな荷袋を見つけると、頭から中に入りこんで、なにやら「そ」そとしてゐる。やがて、全身をしゃくとりむしのようにならせながら、大きな鋼のかたまりを引きずり出した。

ときおり、何かに引つ掛かつて大きな音がする。そのたび、影はびくつ、と震えて草の布団の様子をうかがい、その主が寝ていると見ると、小さく息をはいて、また動き出すのである。

二刻ほど経つたろうか、大きな鋼をなんとか机の下に押し込んだ影は、空いた荷袋に吸い込まれるように入ると、そのまま動かなくなつた。

四

翌朝。地の果てによつやく白いものが見えるころ、岳生は大きな袋を肩にかつぎ、天幕を出た。

しばらく、手足の具合を見るように、ゆっくりと

踏みしめながら歩いてゆく。

十分に寝て体調がよいらしい。あの大斧が入った荷袋が軽く感じられる。

彼は満足げにならずくと、くるりと向きなおつた。

馬たちはまだ、木の杵に頭をもたれている。そのまわりに大小の天幕が、霧の中の島のように浮かんでいる。

岳生は、そのひとつひとつに向かつて、深く頭を下げた。そして最後に、チャムリの天幕が目に入る。

八年前にこの草原で出会つた女の子は、空魔との戦いで傷つき、岩に身を封じた彼が立ち直るまで、ずっと待つてくれていた。

雷遊子によってなれば無理やり封を解かれ、再会してから数ヶ月。術師でない、普通の日常に、彼女は欠くことができない。

しかし、いまの彼は術師に戻らねばならないのである。

7 番外二 ときは流れて

「ちよつと、行つてくらあ。ちゃんと帰つてくつから、心配すんなよ……」

五

昼過ぎ。まだまだ寒い空の下でも、早足のおかげでうつつらと汗をかき始めた頃、彼の腹も少しだけ軽くなつていた。

飯でも……と思つて彼は思わずぴしゃりと額を叩いた。

「ちつきしよう、めしイ忘れつちまつた！」

幸いにも、あたりはなにもない草原から、やや深い草と低い木々の生え始めた場所。立ち止まって目を閉じれば、そここに生き物の気配がする。

彼は、背中の袋から斧を取りだそうと、中に手を突っ込んだ。その途端、

「きゃー！」

岳生は仰天した。顔のわりに小さな眼が、一気に

拳ほどまで広がる。それも無理はない。袋の中に突っ込まれたごつい手が、斧と思つて掴んだものは、気味が悪いくらいに柔らかいものだったのだから。

思わず袋を支えていた腕から力が抜け、それは地面に転がり落ちた。まじまじと見つめる中、見る間にそれは生き返つてゆく。

うなうねとしたその動きをじつと見ながら、岳生の脳裏に、ひとつ嫌な予感が走つた。じわりと近づいて、袋の頭の紐をすべてはずす。とたんに中身が飛び出した！

「あーっ、苦しかった」

飛び出てきたのは長い三つ編み——チャムリだつた。

息を呑み、目を白黒させる岳生へ向けて、笑いながらひとこと。

「逃げようつたつて、だあめよ。一生ついてくんだから——」

岳生は大きく息を吐いた。

落ち着いてその姿をよくよく見れば、普段着ているのとは違つ、薄い蒼の短衣シヤツに胡服スボン。その上から、うす紅色ベニの上着を重ね、足は茶の布でこしらえた上に革の旅草鞋ツバシ。腰の当たりには小さなかばんと水袋。

…長い旅を承知でいるのは明らかだった。

「わかつたわかつた。もういいから背中ついてこいや。…やなモン見ることになるぞ」

「一緒に見るんでしょ」

にこにここと笑いながらの言葉に、岳生は黙だまるほかなかつた。

六

それから十日ほどは何事もなく過ぎた。

岳生は斧の代わりに、道端みちばたに落ちていた棒きれを持ち、持ち前の体力に任せまかせて日々まいごとの獲物えものを得ている。

水はというと、もともと少ない草原でのくらしを活いかしているのか、チャムリがどこからともなく見

つけ出しては飲み水にしている。

おかげで二人とも、特にこれといった困難もなく長城ちやうじやうの裂け目を越え、人の気配の濃いところまでやってきた。

山も木々が多く、息づいている。岳生は、緑の空気を楽しむかのように大きく息を吸い、森をまぶしそうに見ていた。

「おもしろい顔お」

となりで、チャムリがからかい気味に声をかける。

「こら、なに見てんだい」

普通の人間なら脅おびえてしまうほどの視線をかわし、きやらきやらと笑いながらチャムリが言う

「だって、そうじゃない。むかし、あたしたちとはじめて会った頃なんか、ムスツとしちゃつてさ…それがこの顔だもん」

「ま、まあ、いろいろあつたからな」

曲げた人差し指の背で額ひたいを搔く。そのしぐさを見

9 番外二 ときは流れて

つめる娘の視線が、急に鋭すどくなった。

「でも、それだけじゃないわね。なんか、懐かしい、つてかおだわ」

岳生の額にあてがった指が止まった。ため息もつかぬ息をはき、顔をくすしながら、

「かなわねえなあ……ま、そんなもんだ。

ずいぶんまえ、まだ術師なりたての頃に、よくここまでできてたもんさ。あいつらと一緒になあ……」

「また、あの人たちのはなしね。えーと、『鉄身てつしん』さんと『神足しんそく』さんと……そうだ、あなたはなんて名乗ったの?」

「名乗ったわけじゃねえが……そう、『朱顔鬼しゆがんき』か、な」

「朱顔……って、そんなに可愛かわいかったのあ!?!」

再びきやらきやらと笑う娘の顔を、岳生は困ったように眺めていた。

「術師ってなあ、普通のやつらが使えねえような技もってんだろ。中じゃ悪いことする奴もいんだよ。ン

で、俺達三人の修行もかねて、そういう奴等やつらを叩たたき潰つぶしてたんさ。

鉄身の妙漣みょうれん、神足の泉碓いづ——衝派三頭竜さんとうりゆう、か。ひよっとすつと、今でも通じるかも……」

不意に、ごうっ、という鈍い音が、あたりに響いた。岳生が立ち止まる。チャムリは回りを見回しながら

「ねえ……なにか変な音、しない?」

「熊かな。このへんはたまに出るみてえだから」
なおもきよろきよると見回す自こが、動く者を捉とらえた。

「あそこ……人が、襲襲われてる!!」

娘は腕を引つ張ひつて、その場所を示している。だが岳生は、そちらを見もせず、

「ほっとけ」

と一言残すと、腕を掴つかまれたまま、まっすぐ歩いてゆく。

「熊でも虎でも、自分の縄張なわばりつてもんがあんだ。知

らねえで入んのはただの馬鹿だし、知ってて入んなら覚悟してるはず。どっちにしても、助ける義理あねえぜ」

と、そこまで言った瞬間、岳生の動きが止まった。目が大きく見開かれ、額からは汗が浮き出している。

「この、『光』…」

人には…いや、生きる者には、すべて『光』というものがある。ひとりひとり、微妙に異なる光、術師はそれを『回す』ことによつて、さまざまな術を作り出している。それゆえに、他人の中の『光』を感じ取ることができる者も多い。

いま、岳生が感じた『光』、彼はこれに覚えがあった。

(な、なんだこいつ…まさか！)

思った瞬間にはもう駆け出していた。最初の二歩でチャムリが振り飛ばされたことにさえ、彼は気付いていなかった。

まず目に飛び込んできたのは、白い服を着た小さ

な少女だった。左手に草の入ったかごを抱え、そのままの姿で前のめりに倒れている。そして、その背後に、小山ほどもある黒いかたまり。

熊である。

(こいつあ…)

考えるより先に体が動いた。さつと前に飛び出すと、大きな体が少女を覆い隠す。だがそれは、熊の正面に体を晒すことにもなった。

ブンッ

顔のわずか前を、黒い爪の先がかすめて行く。一瞬、目の前が朱に染まる。まぶたの皮一枚、剥ぎとられた。

熊はなけば空振りとなった大きな腕を持って余すかのように、ほんのわずか体を空に舞わせる。

岳生は咄嗟にその中へ飛び込んだ。もう頭でものを考えてはいない。十年も使っていなかった戦いのカンが、いまこの時になつて一気に身体中を駆け巡りはじめたのだ。

11 番外二 ときは流れて

長い爪が両側から押し寄せる。上からは、逃がすものかとばかりにその大きな黒い顔が襲いかかる。岳生は両腕の付け根あたりを掴んで、ねじりはじめた。

そして、膠着^{レオネック}。双方とも動くことができない。もっとも、有利は熊にあった。突っ張った腕を戻すことのできない岳生に対して、熊はその長い爪でじわじわと攻めたてることが出来たからだ。現に、岳生の肩から脇腹にかけて、細く赤い筋が見る間に増えていった。

うぬ、とひとつ唸^{うな}る。意識がカンから頭へと戻り始める。さてどうするかと考えた刹那^{せつな}、

「えいっ！」

どこで拾ったか、自分の腕ほどの太さの棒を持ったチャムリが、力任せに殴りつけてきた。熊がわずかに頭をずらし、ほんの一瞬だが力がぬける。

岳生は再びカンにまかせた。

突っ張った腕をほんのすこし緩^{ゆる}め、全身の力を軸足に叩き込むと、その勢いを腕に借りて平手の底で

打ち付ける。

ズダンッ！

そばのチャムリがはっ、とするほどの音を立てて、掌底^{しょうてい}打^うがきまった。

熊が痛みとも怒りとも思える叫び声を上げる。ありえない方向から爪が来る。とたんに脇腹を一寸^{いちゆん}ほどえぐられた。だがもはや痛みにかまっ余裕はない。

岳生は前に出た。相手の頸^{くび}の両脇をめがけ、渾身^{こんしん}の力をこめた掌底とこぶしを叩き込み続ける。その間にも肩が、腰が、そして顔までもが赤いもので濡^ぬれてゆく。

ごくわずかだが、熊の両腕が緩んだ。

今しかない！頭の中でその思いが閃^{ひらめ}いた瞬間、全身の筋肉が勝手に動き出した。

左足が大地に叩き込まれる。同時に上半身が、胴よねじ切れよとばかりに捻^{ひね}られる。包み込むように開かれた熊の爪に腹が、胸が、腕が切り裂かれる。右

肘をぐいと張る。あとすこし、あとすこしで…

現実には一瞬のはず。だが、その一瞬のなんと長いことか!!

熊の頸骨に肘が触れるちょうどそのとき、下半身がようやく回ってきた。

岳生は右足を大地に叩き込んだ。大地を背負ったその力と、溜めに溜めた体のひねり。そのすべてが肘に注がれる。

グオンツ!!

岳生は熊を押し倒すようにして倒れた。これでだめなら…

どれほど経ったのだろうか。

両腕を持ち上げられる感覚に、彼は我にかえた。

目だけを背後に走らせる。そこには、さきほど襲われていた娘が、岳生の重い体を必死に持ち上げよ

うとしている。

(ああ、やはり…)

あとから駆け寄ったチャムリが、片方の肩を支えたので、彼はなんとか起き上がった。

「だいじょうぶ? ねえ、あなた、近くに村なんかないの?」

「わ、わたしの住む村があるわ。ついてきて」

まるで雲の上をあるくよう。聞こえる声もとぎれとぎれ。夢つつつの意識が消え始める中、彼はぼそつと言った。

「ずいぶん、大きく…」

その言葉は、二人の娘の耳には届かなかった。

七

「——というわけなんだ。

この辺の村は、みんなあいつらにやられちゃった。放つといったら、この村も…

13 番外二 ときは流れて

三頭竜の力、貸しちやくれぬかいか？」
秋風の中、三人の子供に向かつて、男が話しかけていた。

「たしかに、前に通った村も酷いもんだったよな」
真ん中で話を聴いていた、細身の少年が、うなずきながら言つ。

「ああ。壁つつつ壁、みんなぶち壊して、中のモン奪い取つてやがった……ちいと、やり方がひでえ」

顔は子供だが、話しかけている男よりも一回り大きな少年が、むっとした顔で腕を組む。

三人目、左端にいた少年は、いままでずっと目をつむっていたが、やおら目を開けると、他の二人をちらりと見た。

「緑宝寺に伺いをたてる閑はないな。泉碓、岳生、いいか？」

「呼ばれた二人が硬い顔でうなずくのを受けて、三頭竜、たしかにお受けします」

男は手を組み、膝を落として礼をとつた。

「あいつらは明日、あの李の木の下に集まることになつてるそうだ。なんとか逃げ出した村の者が、そう言つてた……」

三人が振り向いた先に、巨木がそびえている。

「李つて、あんなもんか、妙漣!？」

呼ばれた少年は、だまつて首を振る。

なかば葉を落とした大きな李は、ひんやりとした風に揺れていた――

八

李の花特有の香りが、あたりに満ちていた。

窓の外、とても大きな李が逆立ちをしている。彼は、その光景に何の違和感も持つていなかった。

「あ、岳生。気がついた？」

声をかけられた瞬間、岳生は目の前の風景に妙なものを感じた。みんな、逆さになっている。

やがて、はつと意識が戻る。寝かされていたのだ。

頭を持ち上げる。目の前にはチャムリの顔。彼女が差し出す水袋を取ろうと腕を出すと、身体中が引^ひつ^つられた。

よく見ると、あちこちに布が巻き付けてある。脇腹のあたりなど、生々^{なまなま}しい朱色に輝いているが、不思議と痛みはない。

「面倒かけたみてえだな」

岳生は布をほどいて、傷口を見ていた。熊の爪が食い込んだところは、肉がへこんだよつな形で固まっている。

チャムリはその傷を心配そうに眺めている。

「あたしは、水を汲んできただけよ。ここに寝かせたのも、手当したのも、みんなあの娘^こ」

手足を少し動かし、問題ないと見ると、彼は布をすべて剥^はぎとった。

チャムリが着替えを渡しながら言う

「ねえ、あの娘、颯^{さつりん}鈴^{りん}って言うんだって。

この家、あの娘ひとりだけみたいよ」

岳生は帯を結びながらしばらく目をつむり、額にしわをよせた。

「おかしいな。たしかに親はいねえが…」

「なんで、そんなこと知ってるの？」

目を丸くしたチャムリの後ろから、娘が入ってきた。

森の中で見たのと同じ、やや茶がかった白い服。歳はおそらく、チャムリより少し下か。やつれていなければ、さぞかし美人であろうその顔を補^{おぎな}うように、長い髪がまっすぐ垂れている。

「気がついたんだ。はい、食事だよ」

差し出されたのは木の椀^{わん}。中は山菜と肉の汁が入っていた。

「あなたが熊を倒してくれたから、久しぶりにお肉が食べられるわ」

岳生は、受け取った椀をじっと見つめた。そして

一言、

「おかしい」

と言って椀を置いた。

15 番外二 ときは流れて

「この村は、このへんじゃ作物が収穫れつとこのはずだ。…熊が出る山の中にまで入るってな、どういうこつた？」

やつれた娘の顔が、さらに曇る。

横から、チャムリが肩に手を置いた。娘…颯鈴はその手と、チャムリの顔を見つめ、ぼつぼつと話しはじめた。

「この南の山に山賊がいるの。ずっと昔からいてね、いままでは一年に一度、畑でとれたものの五つにひとつをあげる代わりに、この村を守ってくれてたの。だけど、去年は違つた。とれたもの、ほとんど持つてつちやつて、村には食べ物がなくなつちやつたの。だから、あの山まで、食べられる草を採りに行つたのよ。」

始めは、大人の人が行つてたんだけど、みんな山で熊に襲われちゃつて…父さんや母さんも…」
そこで思わず涙ぐむ。

岳生は腕を取り、肉の切れ端だけを避けると、さめた中身を一息に流し込んだ。そのあとから、固い肉をくちやくちやくと噛み締める。

颯鈴の顔を抱くようにしていたチャムリが、岳生の顔を迷子ましこのような目でちら、と見た。

岳生は目をつむり、肉を飲み込むと、一言。「で、その山賊ってな、どこにいるんだ？」

九

「このあたりでは珍しいほどに木の生おい茂しげる山の中。祠ほこらのようなちいさな建物がそこにあつた。」

岳生はその扉を二度ばかり叩いて、大声を張り上げた。

「この山の又シの住まいはここでいいんかい!!」
中の方で、どたどたと足音が響く。

やがて、扉は勢いよく開いた。
「赤麒麟せききりんと知つて言つてんのか!」

飛び出してきた若い男は、右手に鉈なたを持ち、殺気ころみ立たつた表情で相手を睨にらんでいる。

岳生はにやりと笑った。

「ああ、んじややっぱりここでいいんか。迷ってほかんとこ来ちまったかと思っただぜ。」

で、長おきに会あいてえんだがよ、どうすりゃいい？」

若い男は、睨にらんだままで動かない。…いや、動けないでいた。ふた回りは大きい身体からだのせいではない。なにか、圧倒おさされるものがあった。

「兄あにい、きつとこいつですぜ。こないだふもとの村で熊をなぎ倒たしたつてえ奴やつ…」

後ろから、小柄な男が口を挟はさむ。それで彼は、余計よに動けなくなった。山賊メソツの面子めんしと、下の者へのしめしと…

さらに後ろから響まいた声が、彼らを救った。

「なんだ、騒さわがしい」

出てきたのは三十なかばの男。熊の皮の上着をは

おり、腰には小さな斧。岳生には及ばないものの、相当な巨漢である。

「あんたがこここの長かい。俺あ岳生つてえ旅の者だがよ、ちいと訊ききてえことがあつて山ン寄よらしてもらつたんだ」

言いながら、腰ほどもある包みを差し出す。

長が片手でほどくと、中には熊の肉が薫製くんせいにされてつまつていた。

「熊あ倒したつて奴か。で、訊きくつてな、なんだ」

「あんたあふもとの村に、ひでえちよつかい出してようだな。なんでだい？」

長は口をへ、字に曲げた。

「旅のあんたにや、関係ねえ話じゃねえか？」

「白辰はくしんのおやつさんが見たら泣なくぜ、きつと」

あたりがざわめいた。長は息を呑み、大男を検分している。

「何でおやつさんの…前の長ン名前知つて…」

おめえ、何者なにものだい!?!」

17 番外二 ときは流れて

「だから、岳生だって言ってるんだろ。さあ、どうな
んだい！ 答えによっちゃ、俺あいのち投げてもいい
んだぜ!!」

岳生の拳が震える。長は口を曲げたまま大きくう
なずいて、岳生を祠に招き入れた。

山賊たちが十人ほど、囲むように立ち尽くす中、長
と岳生は丸い卓をはさんで席につく。

岳生の持つてきた熊の薫製と、濁り酒にごが卓に乗っ
たところで、長の方が口を開いた。

「あんたあ知ってるようだが、俺達おれたちや別に追いはぎ
するわけじゃねえ。

この山から目の届く村あ守ってやる代わりに、色々
もらってるだけだ」

腕組みをした岳生がうなずく。

「だがこの冬だ。この冬、この辺の村にな、とんで
もねえ暴れもんが来ちまった。

この南にある村ふたつ、丸ごと壊しやがってよ、我

が物顔で居着いてやがる」

卓の上に置かれた長の拳に力が入り、卓がみじみ
しと音を立てた。岳生は腕を組んだまま、その拳を
冷たい目で見ている。

「暴れもん、か。そんぐれえの奴にやられたあな。
赤麒麟も墮おちたもんだ」

立っていた山賊の一人が、ぱつと飛び出し、岳生
の肩を掴む。岳生が目をやる。相手はさっき、祠の
入り口で突つかかってきた男だった。

「相手は仙人せんじんだぜ、仙人！ 弓も鉈も、わけのわから
ねえものに弾はじかれちまう。村の倉だつて、壁かべつてえ
壁ぶち壊して中身奪はつてくん。これをどうしろつ
てんだよ!!」

岳生の目が、異常なまでに鋭くなった。組んだま
まの腕の中で、拳が握りこまれる。

肩を揺ゆすられる感覚で我にかえるまで、一刻はか
かったように感じた。もちろん、実際には一瞬なの
だろうが。

彼は腕組みを解いて、肩を掴んだ腕を軽く押さえた。そして、長の方を見る。今度の視線は、冷たくはなかつた。

視線の先で、長のあごが大きく引かれた。

「そっか。ンなら、そいつらさえいなけりゃ、とりすぎた分、返してやれンだな？」

今まで通りにできるな？」

「俺たちや官吏じゃねエぜ。百姓いじめたつて面白かアねえよ」

間髪を入れず、長が答えた。岳生はにやりと笑い、肩の手を払いのけた。

「わあつた。そのかわりつてわけじゃねえが…武器をもらえねえかな？」

「斧ならあんぜ」

くい、と首で合図をする。脇にいた三人ほどが奥に入り、しばらくすると、なにやら重そつな荷物を抱えて戻つて来た。

「この祠の裏にや洞窟があつてなあ。こいつあ、洞穴

の守り神らしいが、あんたにや丁度いいんじゃねえかな」

にやにやとしたその顔からして、からかっているのは明らか。しかし岳生はお構いなしで斧の握りに手をかけた。

右の肩から腕にかけて、山のように盛り上がったかと思つと、斧がゆつくりと持ち上がる。岳生の顔に笑みが入る。斧の先端が地を離れる。と、斧は不意に宙を舞つた。

追つように岳生が立ち上がる。左手の指先が握りの先をひよい、とかすめたかと思つと、斧はくるりと半回転。卓にその先端が突き刺さると思える刹那、岳生の右手が刃の平をすくうように持ち上げる。地面と平行になつた斧を左手で握り、右足を軸にしてぐるりと一回転。鼻先をかすめてゆく大斧に、赤麒麟の長がびくりと飛びのく。

岳生はそれを右手に持ちかえ、今度は大きく縦に

振り回す。背中から前へ。と、振り降ろされる斧が目の前を通る瞬間に、身体ごと大きく前へ突き出した。そこにいた山賊すべてがのけぞる。だれもが、首を飛ばされたかのような錯覚に陥った。

岳生は、突き出した斧をゆっくり引き戻すと、眼前に掲げて一礼した。

「いい斧だなア。これ、借りていいんかい？」

赤麒麟の長は汗まみれの呆れた顔で口をぱくぱくとしていたが、なんとか一言だけ言った。

「そりやお前エが使うためにあるようなモンだぜ」

十

—— 土煙、土煙、土煙。

その中にときおり、白っぽい閃光が走る。そのたびに、断末魔の悲鳴が轟く。

やがて、煙がおさまったとき、三人の少年が、そこに集まっていた。

瘦せた少年が、回りを見回す。

「これで終わりかな？」

「みてえだな。全部で十五人か」

他の二人より頭ひとつ大きい少年が応えた。

「うん。思ったより楽だった…どうした、妙？」

やや離れて、ひとりしやがみこんでいた少年が、顔だけ振り向く。

「…変だ。誰も抵抗しなかった…」

他の二人は妙漣に近づくと、黄色い大地に座り込んだ。

「しなかつたんじゃなくて、できなかつたんじゃねえか？」

大柄な少年の言葉に、妙は大きく首を振った。

「それじゃ、なおさらおかしいよ。はなしと違う。そんな弱い連中が、村を襲えるわけないじゃないか」

言いながら、両手を上下に決め、目をつむる。

「そっぴや…おい妙、なにしてんだ？」

妙漣は片目だけ開いた。

「二人とも手伝ってくれ。息のあるの探すんだ」
 しばらく三人の少年は、じつと座ったままあたりを探しまわっていた。人の…生きて、いる人の中にある『光』を探しているのである。

やがて妙漣が指し示した場所には、一人の男が倒れていた。

泉碓が、その頭の上で水袋をぶちまける。ぴくりと動いた男の肩を、岳生が揺さぶった

「あんたたちが、村あ襲ったんだろう!!」

いやな予感がする。その思いを振りはらおうと、力の限り、岳生は叫んだ。

だが男は、ごくわずか首を振った。

「ち…がう」

「う、嘘をつけえ!?!」

岳生の目が血走っている。

男が目をあけた。三人の子供達を、目だけ動かし、それぞれ眺め、大きく息を吸う。

「いずれ…わ、かる。」

俺達のことには…気にしなくていい。ただ…あの村を、あの子たちを——」

十一

赤麒麟の山の南にある、そこそこの大きさの村。この村は、確かに半壊していた。

壁という壁が壊され、素通しになった家の中には、妙な形にねじれた人だ、たものが、ちらほら見える。

そんな中で、ひとつだけ壁の残る建物があった。

恐らくは倉であろう、高造りの建物。賊がいるとすれば、ここに違いなかった。

岳生は、大きな袋を背に背負ったまま、その倉に向かって歩きだした。

倉の前には大きな広場。

ゆっくり歩く岳生の頭がわずかに痛む。なにか、嫌な予感がする。十年前の戦いのカンを呼び戻し、あ

21 番外二 ときは流れて

たりの気配を見据える彼の足元で、地面がいきなり爆発した。

ズンッ！

「おうおう、誰か、かかったぞ」

大きな倉の中から、四人の男がゆっくりと出てきた。

もつもつとした土煙が上がり、あたりのすべてを覆い隠している。

男たちは、笑いあいながら煙の方へと歩いていった。

ある者は酒壺をかかえ、またあるものは肉片を啜え。

パカな相手をつまみにしようとして、困むように近づいていった。

そのとき、である。

なにかが、煙の中から飛び出した。

男たちの一人に向け、大きな旋風が走る。

両手の三つ指を軽く曲げて印を作り、そのまま腕

をぐいと引く。

目はあくまで前を見つめつつ、まっすぐに走り寄る。

男に反応する余裕はなかった。

わずかに腰をかがめて両腕を盾代わりにするのが精一杯である。しかし、相手は殴りかかりなどしなかった。

「剛杵衝!!」

引かれた腕の前面で景色がゆがむ。

人の中にある『光』、普段はみえるはずのないこの『内光』だが、あまりの集積度のために、その背後の景色を歪めてしまったのだ。

打ち出せない代わりに莫大な力をもった内光のかたまり、それがこの術の正体である。

目の前の相手が吹き飛んだ。

岳生は背中から大斧をつかみ出すと、吹き飛ばした相手に歩み寄っていった…

——村に戻った少年たちが見たものは、ぼろぼろに壊れた家のあと。それは、先に襲われた村と、まったく同じ姿だった。

「くそっ!!」

地を叩く音がする。巨体が、地に膝をついていた。ほかの二人は、呆然と立ち尽くしている。

そのとき、目の前の家から、袋があらわれた。そのはしからは、玉の器や肉のかたまりが覗いている。

三人が見つめる中、くるりと振り向いたその顔は賊の退治を頼みに来た男だった!!

「光・雷・破!」

妙漣と泉碓が、まったく同時に術を放つ。相手の顔が見えた瞬間のことである。避けられるはずもない。二つの光雷がぶつかり、大袋が弾け飛んだ。

黄色の煙があたり一面に広がる。一刻ほどして、煙がおさまったとき、そこにはぼろぼろになった人間

が倒れているだけだった。

術をしかけた二人は拳を握り、唇を噛みしめながら立っていた。

そのあいだを、大柄な少年がゆらりと歩いてゆく。「岳、どうした?」

横を通り過ぎた岳生の目に狂った光を見た泉碓が、おそろおそろ訊ねる。

「術師の術あ、血が出ねえんだ

血が出ねえから、やってつことがわからねえ。

血が出ねえから、人殺しがわからねえ!」

岳生は、すぐ脇に落ちていた小さな斧を拾い上げ、屍に近づいていった。

妙漣には彼の心がわかった。しかし動けない。

「岳…おい、岳生! やめろ——」

鈍い音が周囲に響く。わずか遅れて、しゅっ、と細い音。それとともに、鮮血が吹き出す。岳生はそれを斧で受けると、斧の平たい面を顔に押しあてた。右の頬がぎらぎらと輝く朱で塗りこめられる。見開いた目もそれにまけじと鬼神のごとく輝いていた。首のない屍を睨みつけた鬼は、その目を上にあげると一言つぶやいた。

「俺達は…人殺しだ」

その視線をまともに受けた相手は、知らずに数歩下がっていた。

「岳生…しゅ、『朱顔鬼』岳生!! 死んだはずじゃ!?!」

「ひ、怯むな! 剛杵衝なら動きながらは打てん。散って距離をとれ!!」

ふっ、と二人が空へ溶けた。『風』に乗ったのだろう。岳生はばっ、と駆け出し、また先の構えをとった。

「剛杵衝!!」

地が裂けるかのような叫びとともに、空がゆがん

だ。その中から男が一人落ちてくる。…ついさっき風に乗ったはずの男が。

男は混乱していた。目の前の朱い顔を見てもわけがわからない。

朱い願の鬼神は表情一つ変えず、背中から斧を取り出した。

ふしゅっ

彼の顔に、朱の部分が増えた。

(剛杵衝ほど光雷を集積すれば、風の流れもゆがむ。だから、『風』に乗った奴の行き先を読んで、そこで術を使えば…)

「泉碓…」

一部始終を見ていた男たちは愕然とした。『風』でも逃げられないとしたら、どうすれば…

「け、結界だ。俺が背負って逃げてやるから、無謬界を張るんだ!!」

もはや見栄もない。結界を背負った二つの影が、山のほうへと逃げてゆく。

朱の鬼はその後を旋風のように追いかける。あと数丈に迫ったところで、鬼はやおら動きを止め、息を整えて構えた。

相手はさらに一丈逃げる。鬼は両腕を脇に構えたまま、足首だけをぐつと動かして、数丈の距離を一気に詰めた。

「剛杵衝!!」

結界に体当たりするようにして両腕を突き出す。と同時に結界がすべて鬼の腕に吸い込まれ、そのまま結界を張っていた男に向けてあふれ出した。

(剛杵衝つてのは、上半身動かせないんだろ? だったら、足首鍛えて、そこだけで跳んで行けば…)

「妙漣…」

朱の鬼が斧を取り出したとき、そこにあつたのは首

のねじ曲がつた屍と、右足のちぎれかけた人間だった。

「ひ、ひっ…」

腕だけで必死に逃げる男を尻目に、朱顔の鬼は屍の首をはねた。

そしてそのまま足音をさせないように振り返ると、一動作で最後の首に斧を入れた。

生きる者のなくなつた原に、朱にまみれた鬼が一人立っている。

日が傾くにつれ、鬼は、次第に人へと戻っていった。遠くに大きな李が見える。凜としたその姿を見つめながら、岳生は歩いていった。

「妙漣、泉碓…」

知らず、思いが口に出る。

「俺あ、いつまでたつてもおめえらの世話になつてんだよなあ…」

十四

李の木の近くでは二人の娘が待っていた。

岳生の姿を認めたチャムリが飛び出す。

「やったのね、岳生！ さっき、山賊の人たちが来てさ、一年分の食料を戻して…」

そこで、言葉が途切れた。

横で、颯鈴も息を呑んでいる。

岳生の巨大な顔が朱に染まっている。傷一つないのに。

どれほど多くの血が流されたか、娘たちにも明らかだった。

「チャムリ、帰るか？」

緑宝寺に頼みや、風乗りの一人くらいよこしてくれねえこともねえだろう…」

笑ったような口調だった。

(でも…)

チャムリはそっと近づくと、岳生の両肩を掴んで

押し下げた。

「？」

押されるままに屈んだ顔に、チャムリの頬が押し付けられる。彼女はそのまま両頬でほおずりした。

「こ、こらーんなことしたら…」

すつと離れたその顔も、岳生にまけないほど朱くなっている。

「これで、おなじだよな」

当惑した顔の岳生が、あきらめたように頭を垂れる。その頭をチャムリが抱きかかえるように撫でていた。

そばでこわこわ見ている颯鈴には、岳生の朱い鬼のような顔が、とてもやさしく微笑んでいるように見えた。

彼女はゆつくりと近づくと、そばにしゃがみ込んで、声をかける。

「お礼、しないとイケないよね。でもどうしよう。お

金はないし…」

岳生がチャムリの肩を軽く叩いた。

チャムリの腕が離れてから、彼は何でもないといった声で言った。

「そんなら…あんたでいい」

「え？」

乾いた血糊が、音をたててはげてゆく。

「今日から、あんたはオレのもんだ」

十五

——その村でただひとつ残った家の隅すみには、三人の子供が押し込められていた。

三歳さんさいぐらいの女の子が二人、その間に、布でくるまれた赤子あかこが一人。

妙漣と泉碓が女の子を抱き上げる。岳生は赤子を掴み上げ、そのあまりの柔らかさに、思わず落としてしまった。

そのとき、三人は同時に頭痛を感じた。ただの頭痛ではない。術師に特有の、爪で握られるような痛み…空魔の気配が強まったのだ。

おのおの型を決める。『光』が回り、痛みが薄れてゆく。もつとも素早く立ち直った妙漣が、思わず息を飲んだ。

腕の中で、幼な児おなごが暴れている。

「二人とも、これ！」

見れば、泉碓の腕でも、子供がじたばたと動きまわっている。

「まさか…」

大きく息を吸い、再び『光』を回す。今度は、子供たちに向けて。女の子たちは、すつ、と眠ってしまった。

この術に、落ち着かせる効果などないのに。

「この子、空魔の気を…！」

「こつちの子もだ。…どうする？」

妙漣と泉碓が、顔を見合わせる中、太く、重い声

が響いた。

「つれてこつ」

声の先では岳生が、手の中の赤子を握ってしまわないよう、苦心している。

「また空魔の気が強まりや、こいつら耐えられねえぜ。それにこの子たちやあ、俺たちの恥の証拠だ…だから、連れてこつー！」

乾いた顔の血糊ちのりに、ひびが入る。

「そつだな。でも、その子は置いて行かないか？」
岳生の抱えた赤子は、さきほどからからずつと眠っている。

「ん。術師にならずにすむんなら…まあそのほうがいいかもしんねえ」

岳生のため息まじりにつぶやく声に、赤子がむずがる。

りいん…その首についていた鈴がひとつ、軽い音をたてた。

「いい音だ」

泉確の顔に笑顔が戻る。

落ち着きなくあたりを見回し、なにことかぶつぶつ言っていた妙漣が、その一言に反応した。

「李すいの木に、鈴か。…つん、そうしよう」

「？」

いぶかしげな顔の二人を交互ごうごに眺める。腕の中の女の子を、あやすように持ち上げると、その寝顔に笑いかけた。

「名前さ…この子たち、離はなれ離はなれになるなら、せめて名前くらい、似たのつけておいてやるつよ。

姓は李、名は…そつだな、麗鈴はなねに華鈴、小さいのは颯鈴はなねでいいかな——」

十六

困いのあるやや大きな町が見えてきた。

颯鈴は浮かぬ顔で、ぼおつと岳生の後ろ姿を見続けている。

岳生は村を出て以来、まったく口を開いていない。脇にいるチャムリは、数歩おきに岳生と颯鈴をちら、ちら、と眺めている。

やがて、宿らしき建物の前で、岳生の歩みが止まった。

彼は懐ふとこから、ぼろぼろになった財布さいふを取り出すと中をあらため、無言のままのれんをくぐる。

「お泊まりですか。それじゃ、お名前を……」

岳生は後ろの二人をちらりと見ると、わざと大きな声で言った。

「東家村とうかそんの住人で東岳生。後ろは妻のチャムリと娘の颯鈴！」

その顔が真っ赤に変わる。血糊めくは拭い取ったはずなのに。

二人の娘は顔を見合わせ、同時に吹き出した。振り返った岳生の両腕に、おのおのぶら下がるように抱きつくくと、呆気あきげに取られる宿の主人を尻目ししめに、笑いながら奥へと消えていった。

むかしのはなしである

注

- 一 七尺：当時の一尺は約30cm
- 二 二刻：当時の一刻は約15分
- 三 一寸：当時の一寸は約3cm